

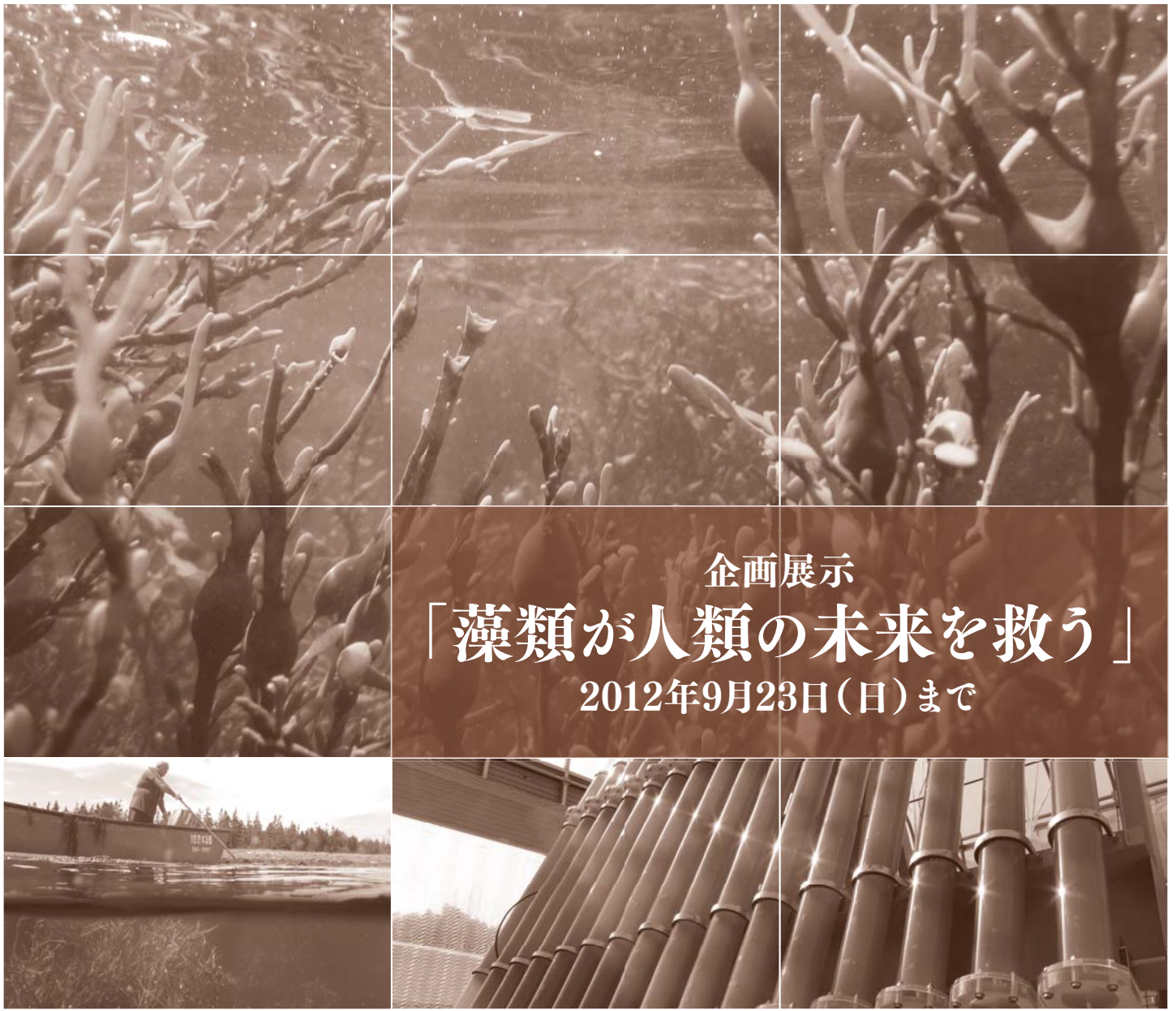


HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	江田, 真毅; 成田, 佳子
Citation	
Issue Date	2012-08-31
DOI	
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49970
Right	
Type	book
Additional Information	
File Information	MuseumNews_25.pdf



Instructions for use



企画展示
「藻類が人類の未来を救う」
2012年9月23日(日)まで

CONTENTS

-
- 01 企画展示
「藻類が人類の未来を救う」開催
-
- 02 中谷宇吉郎没後50年記念行事の開催について
-
- 05 新任教員紹介
-
- 07 ミュージウムマイスターコース
社会体験型科目の2011年度プロジェクトの紹介
-
- 09 特別寄稿
特任教授として北大総合博物館に滞在(2)
—2011年7月1日から10月1日まで—
-

企画展示

「藻類が人類の未来を救う」

●平成24年7月10日～9月23日開催



川嶋昭二博士画 アサクサノリ

藻類(そうるい)とは、体のつくりが比較的単純な、様々な光合成生物の総称です。一部例外もありますが、その多くは光の豊富な浅い水中で生活しているため、われわれ人類の活動による水質悪化や、埋め立てによる生息地の消失などにより、多くの種が絶滅の危機に瀕しています。阿寒湖のマリモや、海苔の代表格のようなアサクサノリも、環境省のレッドデータに掲載されている絶滅危惧種です。

しかし地球の歴史を見ると、むしろ藻類が地球環境を激変させてきたことがわかります。大量の酸素を放出した太古の藻類は地球の大気組成を変質させ、その後の生物の進化の方向に大きな影響を与えました。同時に、鉄や石油といった、現代文明を支える資源も生み出してきました。現在もコンブやワカメのように食用にされるものだけでなく、加工食品、薬品や化粧品等、生

活の身近なところや意外なところで、藻類を原料としたものが使われています。石油系オイルを産生する藻類を利用して、石油枯渇問題と二酸化炭素排出問題、さらに汚水処理までをも同時に解決する、夢のような研究も進んでいます。

北海道大学は、札幌農学校時代のコンブ研究に始まる藻類研究の長い歴史を持ち、世界的な藻類研究拠点のひとつと云われています。当企画展では、今年60周年を迎える日本藻類学会との共催で、われわれ人類と藻類の関わりを紹介します。また、水中カメラマン関勝則氏の新作写真により知床の海中で生きる藻類の姿をご覧いただくほか、本学理学部卒業生であり道内各地の水産試験場長を歴任された川嶋昭二博士による細密な海藻画62点を一同に展示しています。

1階から3階までの階段壁面には実際に触ることのできる標本をキャプションと共に展示して



いますが、この展示は、ミュージアムマイスターの木下大旗さん(理学院修士2年)が制作したものです。木下さんはそのほかに、図録別冊として刊行された「川嶋昭二先生 海藻画作品集」(ミュージアムショップで販売中)の編集も担当しました。

以下の関連セミナー(入場無料・予約不要)を企画しております。

日本藻類学会第36回大会公開講演会

コンブとマリモー 北海道の藻類の話
7月15日(日)16:00～18:00
(会場:北海道大学学術交流会館 講堂)

「北海道におけるコンブ類研究」
四ツ倉 典滋(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)

「昆布のうま味 味わって食べることの意義」
二宮 くみ子(NPOうま味イノベーションセンター)

「阿寒湖におけるマリモの多様な生態と生育環境」
若菜 勇(釧路市教育委員会マリモ研究室)

土曜市民セミナー
(会場:北海道大学総合博物館「知の交流」コーナー)

「マリモはなぜ阿寒湖で丸くなるのか 偶然の重なりがもたらす生物の球化現象」
8月11日(土)13:30～15:30
若菜 勇(釧路市教育委員会マリモ研究室)

「私の藻食論 海藻を食べて健康になりましょう」
9月8日(土)13:30～15:30
舘脇 正和(北海道大学名誉教授)

阿部剛史
(研究部助教/藻類系統分類学)



阿寒湖のマリモ

「地質の日」記念企画展示

「私たちの生活を支える金属鉱床—札幌周辺の鉱山を例に」

●平成24年4月24日～5月27日開催



5月10日の「地質の日」を記念し、標記企画展示が1階「知の統合」コーナーで行われました。札幌西部山地は手稲金鉱山や日本最大級の鉛・亜鉛鉱山である豊羽鉱山があるように、マグマ活動に由来するさまざまな金属鉱床に恵まれ

ています。本展示では、現代社会を支えている金属鉱床のでき方や採掘・製錬の様子、また希少金属など資源問題を市民の皆さんに知っていただくことを目的に「北海道における地質・鉱産物調査の始まり」・「札幌西部山地の金属鉱床」・「豊羽鉱山の生い立ち」・「鉱山の探鉱から採掘・製錬まで」・「鉱山開発と環境—酸性坑廃水の流出とその処理」・「レアアースを確保せよ!」をテーマに、パネルによる説明や手稲鉱山や豊羽鉱山の各種鉱石サンプルや採掘道具を展示しました。

関連行事として、4月30日(月・祝)に地質巡検が行われ、43名の市民が豊羽鉱山の坑内廃水処理施設や坑内外の鉱脈露頭を見学しました。また、5月12日(土)には、渡辺 寧氏(産総

研 地質調査総合センター)による土曜市民セミナー「私たちの生活を支える金属資源: マグマからの贈り物」が行われ、約80名の市民の皆さんが熱心に聞いていました。

在田一則
(資料部研究員/地質学・岩石学)



中谷宇吉郎 没後50年記念行事の開催について

●平成24年4月28日～



「中谷宇吉郎 没後50年」記念行事ポスター

2012(平成24)年は、雪氷学の基礎を築いた中谷宇吉郎博士の没後50年の節目の年にあたります。

中谷博士の業績は「雪の結晶」の研究のみにとどまらず、凍上・着氷・霧・農業物理・水資源・

水の研究等と幅広い低温科学の発展に寄与し、また、教育・文化の国民的課題にも積極的に取り組み、広く社会に対して与えた意義は一大学や専門分野にとどまるものではありません。

中谷博士が育んだ「科学する心」を今一度深く見つめ直し、その足跡を振り返るために「中谷宇吉郎没後50年記念行事」を開催することになりました。

春・夏・秋・冬と季節毎に記念行事は開催されます。4月28日(土)の〈春季〉講演会は200人を超える出席者で超満員となり、6月5日(火)から7月29日(土)までは〈夏季〉展示『人工雪誕生の地』の碑—北大常時低温研究室小史が開催され、マスコミ報道等もなされて大変好評でした。10月2日(火)から12月2日(日)まで〈秋季〉展示「雪と氷の科学者・中谷宇吉郎 展」、平成25年1月29日(土)から2月17日(日)までは、

〈冬季〉展示として「雪のデザイン展」と「科学映画上映」を開催する予定です。

この他にも、博物館内の「知の交流」コーナー常設展示には、北大創基125周年を記念して中谷宇吉郎博士を紹介した展示コーナーが設けられ、「人工雪成長装置(レプリカ)」も展示されているほか、2003年に札幌で開催されたIUGG(国際測地学・地球物理学連合)に合わせて復元された、北大理学部教授室「N123(中谷宇吉郎研究室)」も一般に公開されています。

松枝大治
(資料部研究員/鉱床学・鉱物学)

山崎敏晴
(博物館ボランティア)



〈春季〉「中谷宇吉郎没後50年記念講演会」(土曜市民セミナー)の様子



若き日の中谷博士

都ぞ弥生百年記念展

●平成24年5月20日～6月20日開催



北大恵迪寮々歌「都ぞ弥生」は1912(明治45)年に制定され、本年はちょうど100年の節目です。これを記念して、学内ではさまざまな行事が開催されました。それらと連動する形で本展示が恵迪寮同窓会と恵迪寮によって主催され、総合博物館が共催となりました。

展示内容は、「都ぞ弥生」の成立(1912年4月8日の恵迪寮晩餐会で制定した時の関係資料と作詞・作歌者の資料)、普及(「都ぞ弥生」収録の市販レコード・CD等とその普及拡大に関する資料)、歌碑資料(北大構内の歌碑と静岡市の歌碑の関連資料とビデオ映像)、正調論争(作詞者赤木氏と寮生の論争資料)、その他、恵迪寮の文化財・歴史資料、恵迪寮同窓会の資料などで、北大OBだけではなく、市民にとっても興味深く有意義な展示となりました。

また展示関連セミナーとして、5月20日:「都ぞ弥生とクラーク精神」(藤田正一)、6月9日:「都ぞ弥生これまでの百年とこれからの百年」(佐川光晴)、6月17日:「大学教育における学寮の歴史と意義」(パネルディスカッション)が行われ、学生寮が大学教育において果たす意義についても語られました。

高橋英樹
(研究部教授/植物分類学)

クラーク像を間近に見せる

中央ローンにたたずむクラーク像は、北海道大学のシンボリックな存在です。企画展示「クラーク博士と札幌の植物」(2012年3月3日～5月6日)では、この有名なクラーク像を撮影し展示室の入り口に設置した大型モニターで上映しました。

撮影は人通りの少ない早朝を狙って行ないました。日ごろ目にするクラーク像とは異なった印象を感じてもらうため、クラーク像の周辺に足場を作り、像の後方上部から見下ろす角度や顔の正面30センチという至近距離にカメラを設置しました。

また、映像の表現力だけでなくBGMによる映像とのマッチングにも気を配りました。使用した楽曲は、札幌市内のコンポーザーに企画展示の意義やクラークの故郷であるマサチューセッツ州の風景をイメージして制作するよう依頼したオリジナルのものです。

このクラーク像は北海道大学キャンパスにいつから存在していたのでしょうか。北海道帝国大学附属水産専門部教授であった足田豊治が撮影したガラス乾板写真(水産科学館所蔵)には、1926年5月14日に举行された除幕式の様子が鮮明に記録されています。今回制作した映像では、この写真と現在のクラーク像が時を超えて対峙しました。映像と写真、BGMが一体となり、この映像からクラーク像の新たな見方を発見していただけたことと思います。

藤田良治

(研究部助教/博物館映像学)



来館者を迎える顔



玄関ホール内、階段下の空間に大型モニターを設置しました。

従前より来館者アンケートなどで寄せられていた「総合博物館の入り口を博物館らしく」という声に応えるべくその方法を模索していましたが、アイキャッチ効果が高い映像を使うのが良いのではないかと考えました。しかし、ひとくちに映像とは言っても見せ方は様々です。今回は、入り口付近に設置して違和感のない見せ方を博物館映像学の基礎研究から検討し、50インチのディスプレイを博物館の入り口にふさわしい筐体で包み込むことを提案しました。

来館者に圧迫感を与えることの無いよう、色使いや筐体の縦横比率などはデザイナーの意見を取り入れ、周囲との調和にも配慮しています。さらに、館内を移動する可能性を考慮し、筐体の上部は取り外し式、底面にはキャスターを取り付けました。また、映像再生装置はSDカードから直接映像を読み出す省電力装置を採用しています。これにより、CDやDVD、BDなど使い捨てのメディアを必要としないため廃棄物を出すことが無く、使われている照明には全てLEDを用い省電力化し、環境へも配慮した総合博物館の顔ともいえるウェルカムモニターが完成しました。

藤田良治

(研究部助教/博物館映像学)

学術テーマ展示

「循環から見る自然と人 — 森・土・水」リニューアル



展示室入口のジャングルジムシステム

文学研究科の佐々木亨教授が開講している「展示制作プロセス演習」では、授業の一環として、院生たちの手により実際に総合博物館の展示室を更新する作業が行われています。2011年度は、1階「循環からみる自然と人」展示室を約1年かけてブラッシュアップしました。このブラッシュアップは、更新前の展示物をもとに、不足している情報を補い、デザインを工夫し、展示内容を最新にし、それらを来館者に分かりやすく伝えることが目的です。

前期では、この展示室の内容に大きく関係している北方生物圏フィールド科学センター(以下FSC)と博物館側に提示する企画案を作ることが一番大きな仕事でした。しかし、展示内容が院生たちの専門外であったため、まずは展示室の見学を行い、FSCの森林・水・耕地3圏の先生方にご同行いただきました。また、森林圏に属する苫小牧研究林については現地を訪問し、そのスケールの大きさなど実際のイメージを掴むことができました。このように、前期はブラッシュアップ企画案を提示するため、展示内容の理解に努め、正しく問題点を見る目を養いました。9月には総合博物館で企画案のプレゼンをし、FSCの先生方にもその企画案を了解いただきました。

後期は、授業内の話し合いが中心であった前期とは異なり、実際に行動を起こす場面が多くありました。院生はFSCの3圏と同様に3班に分かれ、前期の企画案をもとに展示内容について、個別にヒアリングをしていきました。その結果を授業で発表し、全員とその情報を共有しまし

た。そして、不足している部分は、またヒアリングを行うという流れを何度も繰り返し、最終的に展示をブラッシュアップすることができました。

今回は、展示室一部屋を手掛けたため作業量が多くなりました。説明不足の部分は情報を補い、展示内容も最新のものとなっています。そして、更新前の展示と比べ、見やすくわかりやすいデザインを心がけました。この授業を通して、院生がFSCの先生方から得た情報は莫大なるものであるために、それを反映した展示パネルでは、文字数が少し多く感じられるかもしれませんが、しかし、ジャングルジムシステム、匂い装置など、文字説明に依らず理解しやすい展示も用意してあります。ぜひ、新しくなった「循環からみる自然と人」をご覧ください。

吉田朋代

(文学研究科修士課程2年)



ベリーの匂い装置

新任教員紹介

●江田真毅



2012年4月より総合博物館に着任しました。遺跡から出土した動物の骨から過去の人々の生活を復元する動物考古学が専門です。幼少のころから、人文科学系と自然科学系の併設された総合博物館が私の夢の職場でした。夢が現実となった今、嬉しさの反面、この仕事に伴う責任の重さを痛感しています。

当館には、文学部附属北方文化研究施設が調査した香深井1遺跡やオンコロマナイ遺跡などの発掘資料が収蔵・展示されています。これらはオホーツク文化—紀元後5～12世紀頃にサハリン南部、北海道北部～東部、千島列島南部の沿岸地帯に展開した海洋民の文化—を代表

する資料群であり、学術的に大変貴重なものです。しっかりと保存管理し、後世に伝えていきたいと考えています。一方で、前任の天野哲也先生のところから、これらのコレクションはDNA分析による系統解析や安定同位体比分析による食性解析など、資料の破損を伴う分析にも利用されてきました。今後も、分析による資料の破損とその分析から得られる知見を天秤にかけながら、教育・研究に活用していきたいと考えています。

着任したばかりでまだ分からないことばかりですが、博物館スタッフの方々やボランティアの皆さんと協力して、北大の皆さんや市民の皆さんにとって、また、遠方からの観光客や研究者の皆さんにとっても、今以上にまた訪れたい博物館になるよう、尽力していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

江田真毅

(研究部講師/考古学)

●山本順司



この博物館に足を踏み入れた時、急激な視界の広がりを感じました。これまで研究所や研究施設を渡り歩いてきましたので、極めて先鋭化した、悪く言えばタコツボ的な環境に身を置いてきたように思います。一方、当博物館には何者をも柔軟に受け入れるルツボのような懐の深さを感じられ、着任以来その居心地の良さにとろけるような気分を味わい続けています。そのような博物館で、情報を発信する側に立てている

ことが誇らしく、また、その責任の重さに奮い立っています。

私がこれまで追いかけてきた課題は、地球科学と宇宙科学の融合です。この地球と言う惑星は当然ながら宇宙の一部であり、地球の研究は宇宙の理解に通じるはずだと信じています。そして、宇宙の理解は人類を長く悩ませてきたある哲学的な謎を解く鍵になるのではないかと想像しています。それゆえ、博物館における展示では宇宙の中の地球を感じられる工夫を凝らしていければと考えています。

まだまだ想いばかりで行動が伴っていませんが、スタッフやボランティアの皆さんの情熱とうまく溶け合い、この博物館を進化させる歯車になれるよう、または潤滑油くらいにはなれるよう努めたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

山本順司

(研究部准教授/地球科学)

特任教員紹介

●Svetlana Chabankenko 博士



本年2月20日から5月19日の間、博物館特任教員として、ユジノサハリンスクのサハリン植物園副園長のSvetlana Chabankenko博士を招へいました。博士は極東ロシア地域における地衣類の分類地理学の専門家、ロシアの地衣類のレッドデータブックの編集にも寄与されています。

今回は、企画展示「クラーク博士と札幌の植物」で展示されたクラーク博士採集の地衣類標本の再同定をしていただきました。また本博物館の植物標本庫所蔵の一般地衣類標本についても同定作業をしていただきました。地衣類研究者がほとんど北海道にいないという現状からも、大変大きな貢献をいただきました。

また、在任中にはつくば市の国立科学博物館も訪問され、日本産地衣類の精査、ロシア産との比較も行われ、本州の地衣類研究者とも研究交流がなされました。また利尻・礼文島でも野外調査をおこないました。

3月10日には市民セミナー「クラーク博士の採集した地衣類」として、クラーク博士採集の地衣類を材料としながら、地衣類の一般的な形態・分類について、市民向けに分りやすくお話をしていただきました。今回の招へいにより地衣類標本の研究調査、博物館教育における啓発活動において、大きな成果をあげることができました。今後ともサハリン植物園とは植物標本・地衣類標本の交換や、サハリン・千島列島地域での共同調査など、研究交流を続けていく予定です。

高橋英樹

(研究部教授/植物分類学)

●Martin Fellows Gomon 博士

総合博物館では、2012年1月5日から3月27日までの約3ヶ月間、特任教授としてオーストラリアのメルボルンにあるビクトリア博物館主任研究員であるマーチン・フェローズ・ゴモン(Martin Fellows Gomon)博士を招へいました。ゴモン博士は魚類分類学が専門で、30年以上オーストラリア周辺海域の魚類分類を行っています。ゴモン博士は滞在中に日本近海に生息する深海性魚類のアオメエソ類とヒウチダイ類の分類学的な研究を行いました。また、函館キャンパスにおいて、ゴモン博士による2回の講演会が開催されました。1回目(2月14日)は「オーストラリアにある自然史博物館の歴史と魚類分類学の現状」について、2回目(3月6日)は「形態と分子の両面から深海性魚類のアオメエソ類を分類する」というタイトルで、滞在中の研究成果も加わった内容となりました。両講演ともに大変好評で、講演終了後には多くの質問が寄せられました。

来日当初、ゴモン博士は雪を35年以上見ていないのと、メルボルン(35度)と函館(-5度)との40度の寒暖差に驚いていましたが、滞在中には大沼公園へ氷上ワカサギ釣りに行ったり、温泉に行ったりと函館での滞在生活を満喫していました。和食も大好きで、特に日本で食べる豚カツが美味しくて気に入り、カツ丼をよく食べていました。

河合俊郎

(研究部助教/魚類分類学)



●Mega Fatimah Rosana 博士



2012年1月1日～3月31日の日程で、インドネシア共和国BandungのPadjadjaran大学(UNPAD)からMega F. Rosana博士(専門: 鉱床学・岩石学)を総合博物館特任教授として招へいました。

Rosana教授は、過去2000年4月～2004年3月の4年間、北大大学院理学研究科研究生として、また地球惑星科学専攻博士課程でインドネシアの鉱床成因論的研究を行ない、博士(理学)の学位を取得し帰国されました。UNPADに復帰後、2007年には同大理学部から地質学部を独立させ、それ以降は副学部長・助教授(本年4月に教授昇進)として精力的に教育研究に貢献して来られた方です。滞在期間中は、「インドネシア、中央スラベシ島Toli-toli地域Dampal UtaraにおけるCu-Au鉱化作用に関する花崗岩類の特性」を主要研究テーマとして筆者及び関係者との共同研究を実施する傍ら、理学院自然科学専攻資源地質科学研究グループの大学院・学部学生の教育・研究指導も行って頂きました。また、現在UNPADで立案中の大学博物館構想の実現を目指して、当館の実状視察と関係者との意見交換も積極的に行なわれました。

また、2011年3月に実現した北大総合博物館とUNPAD地質学部間の学術交流協定締結に際して、Rosana教授はインドネシア側代表として多大な貢献をされ(博物館ニュース第23号参照)、それを受けて国際共同研究プロジェクトが構築されました。その一環として、Rosana教授滞在期間中には同大から新たに2名の関係研究者が当館を訪問し、各種室内実験を含めた共同研究を実施すると共に、国際シンポジウム(P12参照)での講演も行いました。

松枝大治

(資料部研究員/鉱床学・鉱物学)

総合博物館・部局間協定

大韓民国 環境部国立生物資源館と協定を結ぶ



大韓民国の環境部国立生物資源館(National Institute of Biological Resources: 以下、NIBR)は韓国国内で最も規模の大きい生物学博物館の機能をもつ研究所・博物館です。NIBRは2007年に設立された新しい博物館ですが、スタッフとして、北海道大学で学位を取得した研究員が3名もいるなど、北大との関係が深い博物館です。

2012年2月9日に、北海道大学総合博物館において、NIBRと協定の締結を行いました。安館長をはじめ4名が北大を訪問されました。協定の目的は、両館の積極的な交流を行い、アジアの生物多様性研究を、北海道大学総合博物館のテーマ研究の一つと位置づけ促進させることです。特に生物分類学の盛んな北海道大学において、アジア北東域の多様な生物の標本を計画的に長期的に安定して蒐集することは、アジアでの生物学の基礎を確立するためにも欠かせない事業であり、その実行のためにNIBRと北大総合博物館の交流が必要となります。

2012年3月23日には、北海道大学総合博物館から館長を始め7名が韓国のNIBRを訪問し、お互いの交流を深めました。

今後も相互訪問や両館での共同研究を推進していく予定です。

大原昌宏

(研究部教授/昆虫分類学)



ミュージアムマイスターコース 社会体験型科目の2011年度プロジェクトの紹介



Lepidoptera展での展示解説

総合博物館では、2008年度より北大の全人教育を担う「ミュージアムマイスター」認定コースを実施しています。2011年度のミュージアムマイスターコース社会体験型科目では、夏の企画展「LEPIDOPTERA」の展示解説、冬の企画展「クラーク博士と札幌の植物」の展示制作・展示解説、北海道立近代美術館の評価導入プロジェクト(1)(2)、卒論ポスター発表会の発表・運営を実施しました。プロジェクトに参加した学生は39名です。

展示制作では関連マップや誘導サインの作成などを含めた実務を担当しました。展示解説では事前指導を受け、セミナーなどへの参加や資料準備を経て、10回の解説を担当しました。会期中に蓄積されていく質疑応答集を把握し、解説後には毎回レポートを提出して指導を受け、次回の解説にフィードバックさせました。道立近代美術館の評価導入プロジェクトでは、美術館で来館者に質問紙を配布し、集計を行い、美術館の学芸員や事業課職員、担当教員と共にデータを分析して報告書の執筆を分担しました。

卒論ポスター発表会は、本学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、博物館で来場者に分かりやすく発表して質問等に回答することで、自身の研究を見直すだけでなく、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚

起、大学博物館への理解を深めることを目指しています。4回目を迎えた2011年度は、農学部、理学部、文学部、水産学部の4年生10名が参加しました。運営プロジェクトに参加した学生達は、北大カフェプロジェクトのメンバーと共に、プログラム冊子の作成など、コミュニケーションの場を創造する役割を担いました。発表者は、当館担当教職員の指導を受け、他の発表者や運営を担う学生と議論を重ね、ポスターを制作し、2日間、ポスターの前に立って来場者に説明しました。PRタイムでは、3分間でそれぞれの研究のアピールポイントを紹介しました。その後、市民と北大教職員からなる審査員15名の投票による3種類の賞と来場者の投票による来館者賞が、津曲敏郎館長から授与され、審査員からの講評会が行われました。受賞者は次の通りです。

優秀賞：太田菜央(理学部)
文鳥の歌学習とその社会要因

優秀デザイン賞：渡邊彩乃(農学部)
有機農産物の特徴付けのための
メタボローム解析

優秀コミュニケーション賞：小篠絵梨花(理学部)
ラオス、ムン南部地域の地質と銅鉱化作用



卒論ポスター発表会

来館者賞：山田のぞみ(文学部)
ベラスケス作《ラス・イランデーラス》
一糸を紡ぐ女性たちにこめられた意味―

発表会終了後には事後指導を行いました。来場者や審査員、卒論指導教員からご好評をいただいた卒論ポスター発表会を含め、当館では今後も大学博物館のリソースを活かした社会体験型科目を展開していきます。各プロジェクトの活動経過や参加学生の事後考察レポートは当館ホームページをご覧ください。

湯浅万紀子
(研究部准教授/博物館教育学)



北海道立近代美術館の評価導入プロジェクト

「北大ミュージアムクラブ Mouseion(ムーセイオン)」の誕生

2011年の夏、総合博物館で学生発案型の企画を実施する学生グループ「北大ミュージアムクラブMouseion」が誕生しました。ミュージアムクラブは、2011年度の大学院共通授業「博物館コミュニケーション特論」(担当教員:天野哲也、藤田良治、湯浅万紀子)を受講していた5名の大学院生が発足させ、学部生や大学院生のメンバーを二十名余りに増やし、博物館の協力を得ながら活動を展開しています。ミュージアムマイスター数名も加入しています。

2012年2月と3月に開催した「え!?新生が展示解説!?!」というイベントもミュージアムクラブの活動の一つです。このイベントは元々、クラブの創設メンバーである5名の大学院生が、「2011年度に導入された総合入試によって入学した学生たちに、総合博物館で様々な研究分野に触れ、自らの専門性を磨いてほしい!」と考え、企画しました。この企画は、その後2011年7月に北大元気プロジェクトの採択を受けて、本格的に動き出しました。解説を担当することになったのは、北大の学部1年生5名(イベント開催時点での学年)です。彼らはこの日に向けて約4ヶ月間、それぞれに興味を持った館内の展示について勉強と解説練習を重ねました。総合博物館の教職員による監修・協力のもと、展示解説経験のあるメンバーが指導にあたり、ビデオレッスンをしてリハーサルを行いました。展示解説の現場でもサポートするなどメンバー全員でイベントを運営しました。解説の内容は「古生物・植物・魚類の進化や北大における研究」、「クラークなどの外国人教師たち」、「ノーベル化

学賞のクロスカップリング反応」と専門性の高いものでしたが、小道具やクイズを交えて分かりやすく、生き生きと解説していました。

クラブとしてはまだまだ駆け出しの存在ですが、博物館における活動に興味をもったメンバーの学年や専攻は様々であるため、メンバーの間では博物館にかかわる話題に限らず、授業や研究の話が活動の合間に行われることもあり、文系・理系や、学部生・院生を問わず情報交換を行い、それぞれの専門性を高める場にもなっています。

ミュージアムクラブでは、これからも博物館を舞台に活動する学生組織として、総合博物館での新たな活動を展開していきます。今回実施した「え!?新生が展示解説!?!」のように、来館者と学生の交流型イベントも企画中です。是非お楽しみに。

また、「え!?新生が展示解説!?!」の様子をはじめ、これまでの活動についてはクラブの公式ブログ(1)からご覧いただけます。興味のある方は、お気軽にご連絡(2)ください。

(1)ミュージアムクラブ公式ブログ
mouseionhk.blogspot.com

(2)問合せ先
mouseionHK@gmail.com

木下大旗

(理学院自然史科学専攻修士課程2年/ミュージアムマイスター)

総合博物館で 「ミュージアムマイスター」 認定式を実施

●平成24年3月17日開催



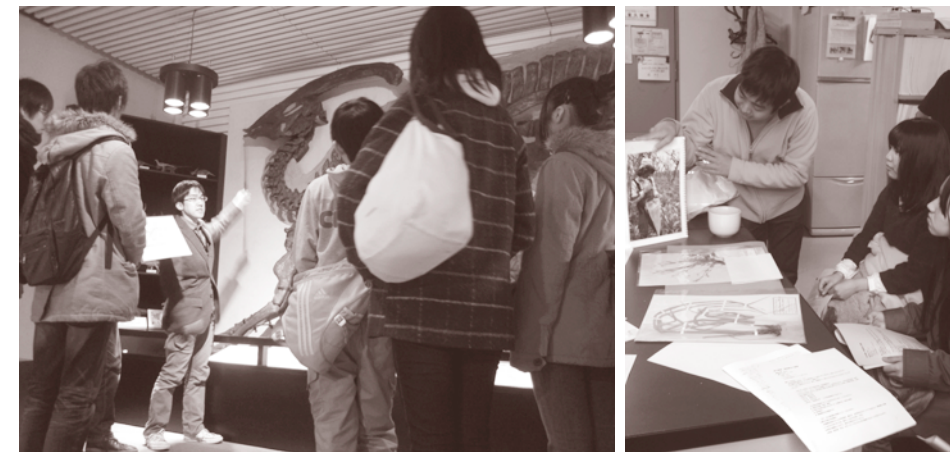
津曲館長とミュージアムマイスター

ミュージアムマイスターコースでは、3つの科目群から各4クレジットを取得し、卒業までのGPAが当該年度学生の平均点以上である学生を、博物館教員による最終面接を経て、ミュージアムマイスターとして認定しています。

今年3月には新たに、大西凜さん(文学部3年)、木下大旗さん(理学院修士1年)の2名が認定されました。認定式は3月17日に総合博物館1階「知の交流」コーナーで行われ、博物館教職員などが見守るなか、館長より認定証が授与されました。

現在、17名がミュージアムマイスターとして認定されています。また、認定コースには105名が登録しており、ミュージアムマイスターになるべく、講義や学生参加プロジェクトなど様々な活動に参加しています。また、マイスターとなった学生達も、北海道・北海道教育委員会・当館が主催したサイエンスパークの司会、博物館まつりの「松枝・天野展」の展示制作、「博物館ニュース」の記事の執筆など新たな取り組みに挑戦しています。「ミュージアムマイスター」認定コース、関連プロジェクトの詳細はHPでも紹介しております。

草嶋乃美
(研究支援推進員)



「え!?新生が展示解説!?!」当日の様子

展示解説経験のある上級生
(ミュージアムマイスター)から指導を受ける

2011年度 第2回ボランティア講座&交流会

総合博物館では、約180名のボランティアの方に標本整理や展示解説、図書室業務など13分野で活動していただいています。水産科学館でも矢部衛館長と河合俊郎助教の指導のもと、学生ボランティアが熱心に活動しています。

2011年度第2回のボランティア講座&交流会を、天野哲也特任教授と松枝大治特任教授を講師にお迎えして2012年2月2日に開催しました。同日に行われた両教授の退職記念講演会での講演「考古学は何を語れるか?」(天野特任教授)、「身近な岩石・鉱物と資源の話」(松枝特任教授)を伺った後に、講演に関連した質問に答えていただいたり、考古学と鉱物・鉱床学が共にカバーする分野についてお話していただきました。また、お助めの博物館や今後の展望なども伺いました。5グループから7名のボランティアにご参加いただき、講師のお二方だけでなく、ボランティア同士の会話も弾み、交流を深めていただきました。

湯浅万紀子

(研究部准教授/博物館教育学)



天野特任教授、松枝特任教授を囲んで

特別寄稿

特任教授として北大総合博物館に滞在(2)

— 2011年7月1日から10月1日まで —

スリ・ハルティニ Sri Hartini

インドネシア科学省(LIPI)生物研究センター、動物部門・ポゴール動物学博物館

今回は、ダニの形態について紹介しました。

現在までに私たちのインドネシアでのハエダニ調査は順調に進み、図3で示したようにほとんどの主要な島と諸島からハエダニ標本を採集しています。

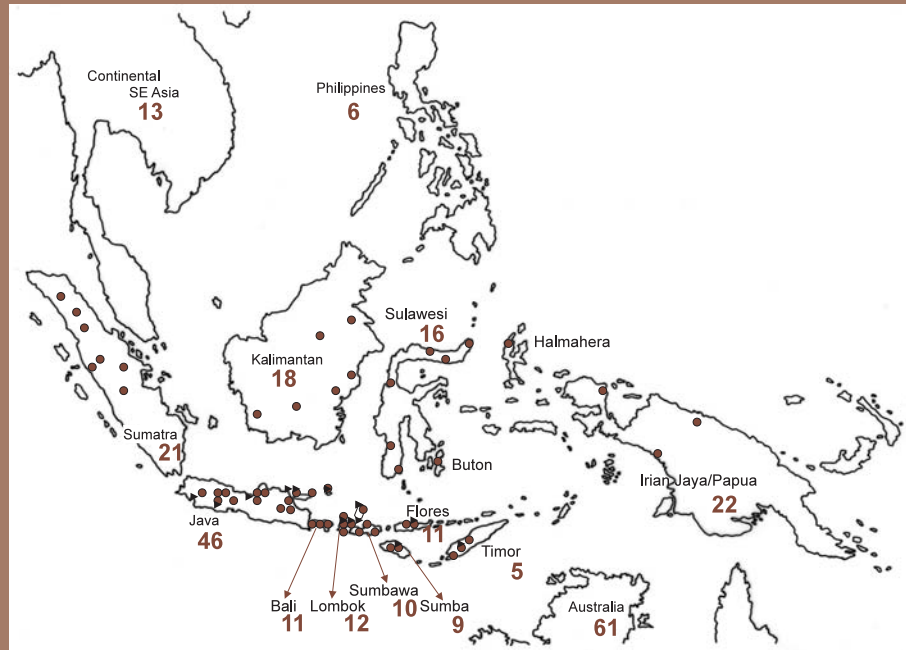


図3 インドネシアにおけるハエダニ標本の採集地とインドネシアとその周辺地域におけるハエダニ類の種数

研究に用いたハエダニはコガネムシ科、コブスジコガネ科、エンマムシ科の甲虫、いわゆるフン虫類と関係しています。甲虫は森の中にトラップ(罠)を仕掛けて採集をします(図4)。あるいは牧草地に放牧されている牛や馬などの家畜の糞から直接採集をします。そして、これらの採集された甲虫からハエダニを採集します。ハエダニ標本は博物館の針に刺された甲虫標本からも採集できます。特にポゴール動物学博物館に所蔵されているコガネムシ標本については十分に研究をして、多くのハエダニを採集できています。採集したダニ標本は、乳酸で汚れを取り、ホイヤー液を用いてスライドガラス標本にします。いくつかの標本については体を解剖して、部位ごとに分けてスライドガラス標本とします。観察は生物顕微鏡下で行います(図5)。



図4 人糞を用いたトラップ

インドネシア産ハエダニ類記録リスト
(1903年~2011年)

年	1903-2001	2001-2011
属	<i>Geholaspis</i> : 1 sp.	<i>Geholaspis</i> : 1 sp.
	<i>Glyphtholaspis</i> : 3 spp.	<i>Glyphtholaspis</i> : 5 spp.
	<i>Holostaspella</i> : 4 spp.	<i>Holostaspella</i> : 11 spp.
	<i>Neopodocinum</i> : 6 spp.	<i>Neopodocinum</i> : 11 spp.
	<i>Macrocheles</i> : 13 spp.	<i>Macrocheles</i> : 50 spp.
合計	5属27種	5属78種

2001年以降に記録されたインドネシアのハエダニ類は以下のとおりです。*Geholaspis*属1種、*Glyphtholaspis*属5種[2種を追加(内訳:1種は記載済み、1種を新記録)]、*Neopodocinum*属11種[5種を追加(今回1新種を記載、3種は記載済み、1種を新記録)]、*Holostaspella*属11種[7種を追加(5種は記載済み、2種を新記録)]、*Macrocheles*属50種[37種を追加(23種は記載済み、5種を新記録、今回9新種を記載)]。合計でハエダニ科5属78種が2011年までにインドネシアから記録されました。インドネシアは広大でかつ多くの島があります。私はまだまだ多くの未記載のハエダニ類がインドネシアにいることを確信しています。インドネシアと周辺域の種数を図3に示しました。

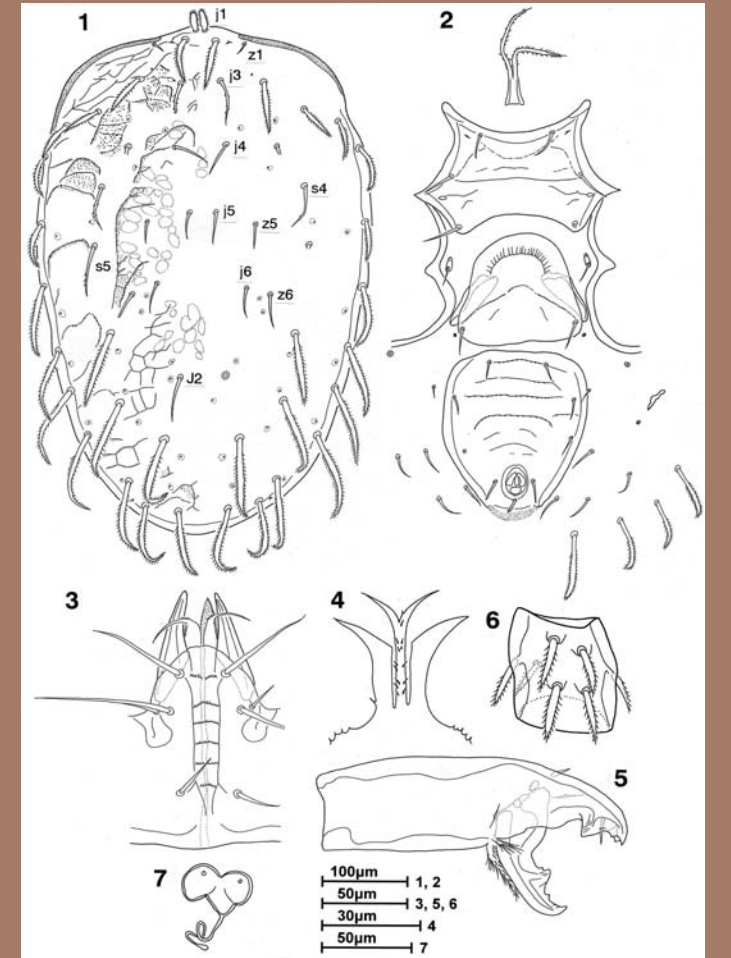


図6 発表予定の*Macrocheles*属の一種(♀)のスケッチ

北海道大学総合博物館に滞在中、論文の執筆を進め、2つの論文が既に完成し、そのうちの1論文は、大原昌宏教授、高久元教授、Dhian Dwibadra女史と共著のもので、インドネシアの東ジャワにあるバルーラン国立公園のフ

ン虫に関係するハエダニ類の分類学論文です。この調査地では、1910年のBerlese博士の原記載以後記録のなかった*Macrocheles*属の一種が採集されました。特にこの種の雄は初めての記録であり、論文で雌(図6)とともに再記載と記録をする予定です。

論文執筆と同時に、北大総合博物館滞在中の2011年9月25日には国際シンポジウムを開催しました。発表者は私と北海道教育大学札幌校の高久元教授で、多くの方にダニの研究を紹介することができ、良い思い出となっています。

最後に、大原昌宏教授には共同研究と滞在中の献身的なサポートをしていただきました。そして、北海道大学総合博物館の館長には、特任教授として招聘をしていただきました。心より厚くお礼申し上げます。

翻訳:大原昌宏

(研究部教授/昆虫分類学)

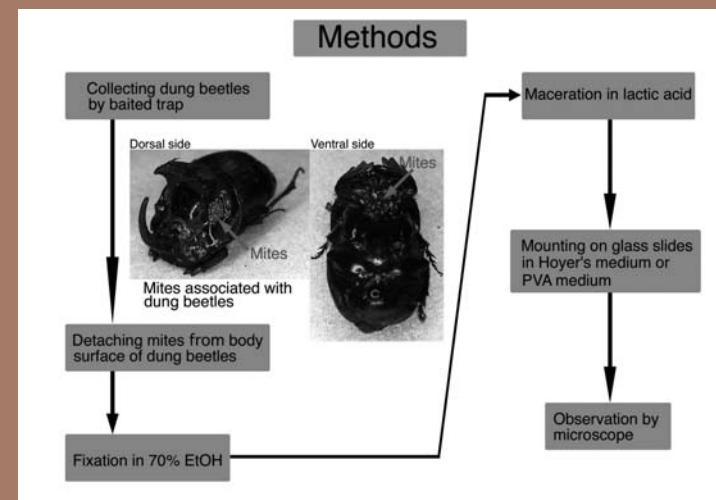


図5 野外で採集されたハエダニを観察するまでの処理方法

「エルムの杜の宝もの」 ―道新ぶんぶんクラブとの共催講座を開催

総合博物館では2009年度から北海道新聞ぶんぶんクラブとの共催講座「エルムの杜の宝もの」を開催しております。道新ぶんぶんクラブ会員を対象にした講座であり、当館を初めて訪れる方も多く、この講座を通して当館を知っていただくよい機会になっています。通常は展示していない学術標本を間近にご覧いただいたり、札幌キャンパスの建造物や考古遺跡を巡ったり、植物を観察するツアーを開催し、本学の研究の伝統と現在を解説し、ご好評をいただきました。2011年6月から10月に開講した講座は次の通

りです。第1回「私たちの地球はムシだらけ 昆虫の多様な世界」(大原昌宏教授/昆虫分類学)、第2回「歴史的建築物を巡るキャンパスツアー」(池上重康助教/近代建築史学)、第3回「植物観察のエコキャンパスツアー」(高橋英樹教授/植物体系学)、第4回「ティラノサウルスの謎」(小林快次准教授/古脊椎動物学)、第5回「遺跡群から見た北大キャンパスと周辺地域の歴史」(天野哲也特任教授/考古学)。また、水産科学館でも、「海の恵みガゴメが支える食・健康・美容」(安井肇教授/海洋産業科学)を開



第5回の講座

催しました。毎回、ボランティアの方々にもご協力いただき、運営しました。

湯浅万紀子

(研究部准教授/博物館教育学)

ポプラチェンバロコンサート

●平成23年11月3日・11月23日・12月23日開催



1F「知の交流」コーナーでのポプラチェンバロ演奏は毎週木曜日と毎月第2・第4水曜日に行われ、多くの来館者からご好評を得ています。

11月3日(木・祝)は毎週の演奏を拡大し、バロック・リコーダー、ヴィオラ・ダ・ガンバ、声楽も加わった「秋の古楽器コンサート」を開催しました。また、11月23日(水・祝)は「ポプラチェンバロ演奏会vol.12」として、バロック・トランペット、バロック・ヴァイオリン、声楽を交えての開催となりました。12月23日(金・祝)にはヴィオラ・ダ・ガンバ、バロック・トランペット、フラウト・トラヴェルソ、ヴォイスフルート、声楽が加わり「クリスマスコンサート」を開催しました。いずれの演奏もバロック音楽が中心となりましたが、会場から溢れるほどのご参加をいただき、多彩なプログラムをお楽しみいただきました。聴衆からは楽器に関する質問なども寄せられ、演奏するボランティアの皆さんが熱心に答えていました。

阿部剛史

(研究部助教/海藻系統分類学)

シンポジウム

「デスモスチルスの最新研究」

●平成23年12月22日開催

東京大学の犬塚則久先生を講師にお迎えし、当館共同研究室においてシンポジウムを開催しました。犬塚先生はデスモスチルス研究の第一人者であり、その進化や生態復元を研究されています。当館所蔵のデスモスチルス気屯標本の研究においていただくこととなったため、併せてご講演をお願いしご快諾いただきました。



シンポジウムでは、デスモスチルス骨格化石が持つ歴史的な背景、系統解析による分類、デスモスチルスとその近縁種の進化過程、そしてどのような生活をしてきたかまで、様々な角度からデスモスチルスを解説していただきました。1時間の予定を超え最終的には2時間程の講演となりましたが、多くのトピックスについてじっくりとお話していただき、参加者の皆さんも熱心に聴き入っていました。

小林快次

(研究部准教授/古生物学)

公開シンポジウム

「絶滅動物化石の最新研究 in 2012」

●平成24年1月19日開催

当博物館では古脊椎動物の研究が盛んに行われており、その研究成果を一般の方々に解説しようという趣旨のもと、海棲爬虫類・恐竜・鳥類・哺乳類・博物館学など、多方面の研究発表を行うシンポジウムを開催しました。

当日は、ニュージーランド・オタゴ大学博士課程の田中嘉寛さん、カナダ・カルガリー大学修士課程の田中康平さんといった、現在海外へ留学中の北大OBも参加しました。未公表の研究成果も含まれており専門的な内容ではありませんでしたが、解り易いよう噛み砕いた表現を用い、パワーポイントを使用した発表には参加者の皆さんから高い関心が寄せられました。また、開催については後日北海道新聞でも紹介されました。

このシンポジウムは今回に留まらず、今後も2〜3年ごとに行っていこうと考えております。

小林快次

(研究部准教授/古生物学)



公開シンポジウム

「クラーク博士とアジアの植物学」

●平成24年3月2日開催



企画展示「クラーク博士と札幌の植物」の関連行事として、表記シンポジウムを2012年3月2日に開催しました。

マサチューセッツ大学植物標本庫のKaren Searcy博士に「William S. Clark the Collector」というテーマで、クラーク博士と植物採集、標本作製とのかわりについて解説していただき、日

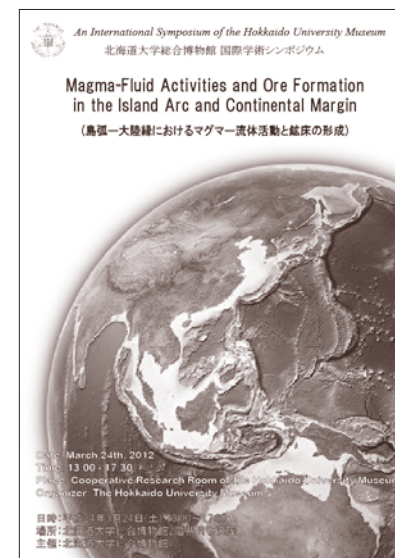
本ではあまり見られない資料写真をご紹介しますことができました。

次に、ハーバード大学植物標本庫のDavid Boufford博士に「The Harvard University Herbaria and Asian Botany」というテーマで発表していただき、ハーバード大学植物標本庫の歴史、特にアジアの植物学との強いつながりが

学術シンポジウム

「Magma-Fluid Activities and Ore Formation in the Island Arc and Continental Margin」 (島弧―大陸縁におけるマグマ―流体活動と鉱床の形成)開催

●平成24年3月2日開催



国際シンポジウム関連ポスター

本シンポジウムは、同年1月1日〜3月31日の日程でインドネシアより招聘中であった特任教授Mega F. Rosana博士に関わるもので、6カ国(日本、インドネシア、ロシア、インド、中国、ネパール)から合計35名が出席し、会場となった博物館2階共同研究室は満席で、立ち見も出る状態でした。Rosana特任教授による特別講演のほか、一般講演9件の口頭発表がすべて英語で行われました。また、会場にはポスターセッションも併設されて活発な討議が交わされ、実質的な国際シンポジウムとなりました。

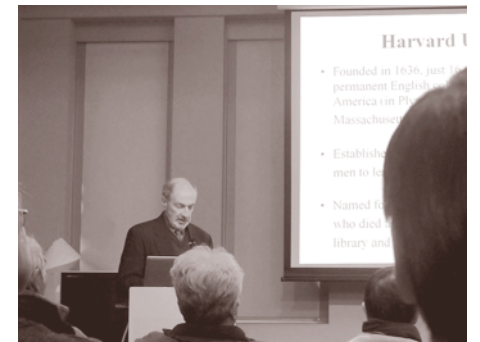
講演では、カムチャッカ、日本、インドネシア、スリランカ、インドなど、環太平洋西部地域を中心とした多岐にわたる興味深い各種の関係話題が提供されました。また特別枠として、昨年3月に当館と学術協定を結び、共同研究を既に開

説明されました。また、ペリーの黒船が採集した植物標本を鑑定したハーバード大学のエイサ・グレイ博士について、北米東部の植物と東アジアの植物の間に見られる共通性についての指摘、ダーウィンの進化論との関係など大変興味深いトピックもあり、参加者の皆さんも熱心に聴いていました。

なお、お二方には展示図録『クラーク博士と札幌の植物』に寄稿していただきましたので、おおよその発表内容をお読み頂けます。

高橋英樹

(研究部教授/植物体系学)



始しているインドネシアPadjadjaran大学からの研究者2名による関係講演も行なわれ、大幅に予定時間を超えて活発な討議が交わされるなど、有意義で実りあるシンポジウムとなりました。シンポジウム終了後は場所を百年記念会館きやら亭に移し、筆者の定年退職記念祝賀会を兼ねた懇親会が催され、一般参加者も含めて40名あまりの出席者のもと盛会のうちに終了しました。

松枝大治

(資料部研究員/鉱床学・鉱物学)



国際シンポジウムの様子(総合博物館2F共同研究室)

お礼

以下の方々当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等で協力いただきました。謹んで御礼申し上げます(平成23年10月1日～平成24年3月31日)

(敬称略)

●植物標本

阿部桂子, 上原久美子, 大原和広, 桂田泰恵, 加藤典明, 加藤ゆき恵, 金上由紀, 黒田シヅ, 佐藤広行, 須田 節, 高橋美智子, 徳原和子, 船迫吉江, 星野フサ, 松井 洋, 村上麻季, 吉中弘介, 与那覇モト子

●菌類標本

石田多香子, 菅 妙子, 齋藤美智子, 鈴木順子, 外山知子, 伴戸香月, 丸山満枝, 三浦美恵子, 矢部敦子

●昆虫標本

久万田敏夫, 青山慎一, 石濱宣夫, 梅田邦子, 大額実咲, 大矢朗子, 喜多尾利枝子, 釘本竜大, 小向 愛, 佐藤罔男, 志津木眞理子, 志藤奈津子, 須長直美, 問田高宏, 鳥山麻央, 永山 修, 西村和也, 古田未央, 榎田忠孝, 松本侑三, 丸子勝彦, 宮 敏雄, 宮本昌子, 村井容子, 村山茂樹, 山本ひとみ

●考古学系

伊藤なつみ, 大西 凜, 亀井和久, 齊藤理恵子, 齊藤 遼, 佐々木征一, 甚野知世, 西本結美, 矢野加奈

●地学

在田一則, 上林彰人, 岡田奈緒美, 岡田美佐子, 生越昭裕, 加藤典明, 加藤利佳, 加藤義典, 甲山幸子, 堺 俊樹, 佐藤和子, サンディー・ザルディー, 嶋野月江, 田中奈月, 塚田則生, 筒井彦七郎, 寺坂絵里, 寺西辰郎, 野村敏則, 福地伸

章, 安田 正, 山崎敏晴, 山本ひとみ, 与板清香, ロバート・クルツ, 渡辺隆司

●情報

石田祐也, 手塚麻子, 山田のぞみ

●化石

朝見寿恵, 荒木真野子, 安藤匠平, 飯島正也, 池上 森, 石田祐也, 石橋七朗, 伊藤いずみ, 上林彰仁, 大澤千里, 大塚健斗, 岡田美佐子, 岡野忠雄, 尾上洋子, 加藤利佳, 菊地 優, 久保田彩, 栗野里香, 小向 愛, 近藤知子, 近藤弘子, 酒井 実, 鈴木順子, 園部英俊, 高崎竜司, 田中康平, 田中公教, 田中奈月, 田中嘉寛, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手塚麻子, 寺西育代, 寺西辰郎, 冨野淳子, 内藤美穂子, 中島悠貴, 長瀬のぞみ, 永田萌子, 中野 系, 長谷部陽子, 古井 空, 前田大智, 森 淑子, 安田 正, 八巻千晶, 山下暁子, 吉田純輝, 渡辺隆司

●北大の歴史展示

石川満寿夫, 石黒弘子, 寺西辰郎

●展示解説

在田一則, 石田祐也, 石橋七朗, 上原久美子, 大塚健斗, 河本恵子, 菊地 優, 北越美紀子, 児玉 諭, 小向 愛, 園部英俊, 高崎竜司, 武田増満, 田中公教, 田中嘉寛, 千葉謙太郎, 塚田則生, 寺西辰郎, 中野 系, 成田敦史, 西川笙子, 沼崎麻子, 沼田勇美, 村井容子, 村上龍子

●平成遠友夜学校

石川満寿夫, 石黒弘子, 石田多香子, 柿本恵美, 菅 妙子, 久保拓士, 齋藤美智子, 齋藤 亮, 笹森映里, 城下洽子, 高山緋沙子, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 細谷信二, 牧野小枝子, 村井容子, 山岸博子

●図書

亀井和久, 児玉 諭, 齋藤美智子, 沼田勇美, 久末進一, 鮎田久意, 星野フサ, 村上龍子, 八木田道敏, 安田 正, 山岸博子

●4Dシアター

石倉未奈, 井上拓己, 久保拓士, 小松麻美, 笹森映里, 世古明史, 瀬川陽子, 高平 謙, 日浦皓一郎, 福澄孝博, 若山真梨子

●ポプラチェンバロ

浅川広子, 荒尾さおり, 池野麻里, 石川恵子, 石川万利子, 大友弥生, 大矢朗子, 小野敏史, 植田幸子, 近藤道雄, 佐藤浩輔, 清水聡子, 新林俊哉, 園部英俊, 大宮司幸枝, 高橋友子, 谷川千佳子, 津滝麻衣子, 田邊由美子, 長竹 新, 新妻美紀, 野村さおり, 浜田宏之, 福土江里, 藤井美雪, 堀内麻衣, 前田有紀, 松田祥子, 三浦亜利紗, 渡邊万記子

●翻訳

合田守緒, 津滝麻衣子, 松田祥子

●HUISA

シュマコワ・ナターリヤ

●水産科学館

渥美圭佑, 池田浩介, 大島由貴, 大野明宏, 大橋慎平, 荻本啓介, 長田詩織, 加藤君佳, 兼平奈緒子, 川内悳郎, 北畠 空, 君島裕介, 久保徹郎, 小林由紀, 櫻井慎大, 佐々木詞春, 佐々木嘉子, 佐藤広崇, 須田健太, 瀧宮 誠, 田島秀一郎, 竜田直樹, 館山怜央, 天田未貴, 富安 信, 長尾太地, 中村翠珠, 永野優季, 西尾 直, 本間康博, 松尾謙人, 松田純佳, 丸山奏子, 武藤智子, 森田恭司, 山中智之, 山本みつ美, 山本雄士

●クラーク展展示解説

在田一則, 石黒弘子, 石田多香子, 金上由紀, 菅 妙子, 久保田彩, 黒田シヅ, 齋藤美智子, 鈴木順子, 須田 節, 高橋美智子, 武田増満, 塚田則生, 寺西辰郎, 徳原和子, 永山 修, 新妻美紀, 野村さおり, 福岡沙和, 船迫吉江, 星野フサ, 松井 洋, 村上龍子, 矢部敦子, 山岸博子, 山本ひとみ, 吉中弘介, 与那覇モト子

[表紙写真]

上/アスコフィルム(食品添加物などに利用するアルギン酸を含む褐藻の一種) 左下/アスコフィルム収穫の様子(カナダ) 右下/オイル産生藻の培養